

「現場」を歩く——神戸

三井物産も抜いた鈴木商店

明治三十五年一〇月一日、神戸市栄町四丁目四五番屋敷に本店をおく鈴木商店が、神戸区裁判所に合名会社の登記をした。

当時、わが国の総合商社業界では財閥系の三井物産、三菱商事が覇権を争っていた。そこに個人貿易商の鈴木商店が果敢に斬りこんでゆくのだが、その第一歩がこの組織変更であった。

鈴木商店は鈴木岩治郎が明治一〇年、神戸で創業。おもな業務は砂糖の輸入・販売だった。同一九年、高知から二一歳の青年貿易商・金子直吉が雇用され、樟腦の輸入を手がける。直吉は台湾産樟腦油の独占販売権を獲得、これを契機に会社は急成長する。同二七年岩治郎が死去し、よね未亡人が店主に就任すると、直吉は番頭として同店の運営を一任された。

合名会社鈴木商店はロンドン、ハンブルク、ニューヨークと世界各地に代理店を設置。直吉は代理店からの情報を分析、大胆な商品買い付けと販売を展開する。第一次世界大戦が勃発すると、億単位の商取引をことごとく成功させ、利益を事業拡大に投下。鈴木商店は鋼材、造船、化学、繊維など、あらゆる業種の会社を傘下におくコングロマリットに変身した。

大正六年、鈴木商店の年商は一五億四〇〇〇万円で、三井物産を四億円以上も引き離し、業界トップに立つ。が、第一次世界大戦の終息とともに経営難におちいり、昭和二年倒産。



(読売新聞・YEN頁より転載)

速水 アメリカが新政策を発表した時、時差の関係で日本は十六日の月曜日を迎えていて、この日だけで七億ドル以上を買った。当日はやむを得ないにしても、翌日以降も開いたことについて、欧州各国は「減値するのが確実なドルを、日銀はなぜ大量に買うのか」と批判的で、私もその旨を本店に伝えました。

——結局、日本は一週間も市場を開け続けましたね。

速水 輸出企業は一ドル〇三六〇円を「天動説」のように信じていたので、いきなり変動相場制にするのはショックが大き過ぎるし、「世界に冠たる為替管理」で、投機はある程度抑えられれるとも考えたようです。ただ、後でこんなことを聞きました。当時、銀行が輸出業者から買い取ったドル建ての期限付き輸出手形を引き当てにして、日銀が低利の円資金を銀行に融資するという輸出振興のための金融措置がありました。銀行にとって、これは期日に外国の輸入先から代金(ドル)を取り立て、円に替えるまでドルの買い持ちになる。もし、一連の取引の途中で為替市場が閉鎖されてドルが暴落したら、日本国内で金融不安を招きかねない——。そんな判断も市場閉鎖をためらう一因だったのかもしれない。

日本一の名番頭の素顔

鈴木商店の創業地を訪ねてみた。四五番屋敷は、現在の中央区栄町通四丁目二番地に相当する。大通りと並行して南に裏通りがある。その小路に面して建つ木造二階建て家屋だったというが、近隣の住人で鈴木商店と金子直吉を知る人はまったくいなかった。

鈴木商店の傘下には、倒産時七八社あった。それぞれ再建されるのだが、主要企業には、日商(現・日商岩井)、神戸製鋼所、帝人などがある。昭和三年、金子直吉はこれも鈴木系列企業の太陽曹達(現・太陽鉱工)に招かれ、以後、同一九年に病没するまで相談役をつとめた。

太陽鉱工のトレードマークは鈴木商店と同じもので、同社、鈴木治雄会長は、創業者の直系。金野和夫取締役が指摘する。

「番頭が誠実である、という点は金子相談役以来、当社の伝統と言えます」

直吉は社外に金を出さない主義で、「鈴木は財産は風船玉のようなもの」

と、称していた。株式会社への組織転換を否定、株主に配当するくらいなら銀行から借りた方がましと考え、それが破綻へつながったと指摘される。

彼の私生活は真面目そのもの。酒、タバコをたしなまず、賭事、待合遊びの類には縁がなく、接待もやらない。晩年まで借家住まいで私的蓄財には無関心だった。生涯一度も「社長」の椅子に坐らなかつた直吉だが、日本を代表する「名番頭」として、もっと評価されてしかるべきだと思う。

(「目録二十世紀」八十二号より)

『カネタツ』マークと私との絆

中村 勇 吉

本年一月二十一日、生田神社会館で、金子直吉翁三十年祭がしめやかに営まれた。正面に翁の胸像が置かれ、その右側に何時もの通り懐かしい罫マークの暖簾が吊られて居た。其時金子翁と此のマークとの永い年月の連繫を思い私の胸を強く打つものがあった。

と申すのは、鈴木ブランド薄荷脳、薄荷油のラベルの罫マークが其の製品と共に明治卅六年以来現在まで約七十年間、内外津々浦々に知れ渡り続けて居る事実であり、私の社会生活が直接、間接に此の罫マークと切り離せない関係にあったからである。其の思い出を此処に書かせて戴きます。

曾って金子翁が鈴木商店に入店され、製造販売事業を始められた主要商品は罫マーク薄荷脳、油と樟腦、油であった事は誰も御承知の通りである。

私は大正六年、関西学院高商部を卒業。直に鈴木商店本社に入社。倉庫部に於て、金子、松方両翁御発案の日本船鉄交換での輸入鉄材荷受関係事務を担当した。是れが私の社会生活の第一歩であった。日々本社と兵庫の川崎造船所を抱えの廻の人力車で往復して居たのも懐しい思い出である。

翌大正七年五月、突然の朗報。それはシャトル支店へ転勤を命ぜられた事だ。学生時代の唯一の希望であった憧れの海外、然もアメリカ生活と云う好機を得た喜び。出発前に、御家様に亦西川(文)氏に感謝の気持ち一杯で御別れの御挨拶をした事を記憶して居る。それと相